

【原文】

是故聖賢好天要文也。天者、衆道之精也。賢者好道、故次聖。聖（*原文の「賢」を「聖」に改めて読む。注を参照）者入真道、故次仙。知能仙者必真、故次真。知真者必致神。神者、上与天同形合理、故天称神、能使神也。神也者、皇天之吏也。神人者、皇天第一心也。天地之性、清者治濁、濁者不得治清。精光為万物之心。明治者用心察事、当用清明。

【訓読】

是の故に聖賢は天の要文を好むなり。天は衆道の精なり。賢なる者は道を好む、故に聖に次ぐ。聖（*）者は真道に入る、故に仙に次ぐ。仙を知りて能くする者は必ず真なり、故に真に次ぐ。真を知る者は必ず神を致す。神なる者は、上は天と形を同じくして理を合す。故に天は神と称し、能く神を使うなり。神なる者は、皇天の吏なり。神人なる者は、皇天の第一の心なり。天地の性、清なる者は濁を治むるも、濁なる者は清を治むるを得ず。精光は万物の心為り。治に明らかなる者は心を用いて事を察し、当に清明を用うべし。

【訳文】

それゆえ、聖人・賢人は天の要文を好む。天は多くの道のうちの精なるものである。賢人は道を好む。それゆえ、聖人に次ぐ。聖人（*）は真道に入る。それゆえ、仙人に次ぐ。仙人のことを知っていて仙人になることができる者は、必ず真人になる。それゆえ、真人に次ぐ。真人のことを知っている者は、必ず神人を招き寄せることができる。神人は、上は天と形を同じくし、理が合致している。それゆえ、天は神と称し、神人を驅使することができる。神人というのは、皇天の吏である。神人は、皇天の第一の心である。天地の性として、清らかなものは濁ったものを治めることができるが、濁ったものは清らかなものを治めることはできない。精なる光は、万物の心である。明らかな統治を行う者は、心を用いて事を察し、必ず清らかで明るいものを用いなければならない。

【参考】

・ 下文 A（十五葉表十行目〜裏五行目）

⑩奴婢↓⑨善人↓⑧賢人↓⑦聖人↓⑥道↓⑤仙↓④真↓③神↓②皇天↓①委氣

・ 下文 B（十五葉裏十行目〜十六葉表三行目）

①天↑②地↑③神人↑④真人↑⑤仙人↑⑥道人↑⑦聖人↑⑧賢人

・ 『太平経』卷四十一「分解本末法第五十三」（合校七八頁）

「人或生而不知学問、遂成愚人。夫無知之人、但独愁苦而死、尚有過於地下。魂魄見事、不得遊樂、身死尚不得成善鬼。今善師学人也、洒使下愚賤之人成善人、善善而不止、更賢、賢而不止、洒得次聖。聖而不止、洒得深知真道。守道而不止、洒得仙不死。仙而不止、洒得成真。真而不止、洒得成神。神而不止、洒得与天其德。天比不止、洒得与元氣比其德。」

元氣迺包裹天地八方、莫不受氣而生。」

⑩下愚賤之人↓⑨善人↓⑧賢↓⑦聖↓⑥道↓⑤仙↓④真↓③神↓②天↓①元氣

【注】

○聖賢好天要文也

『太平經鈔』丙部卷三、六葉裏（合校八四頁）「拘校上古中古下古道書、集衆賢共誦視古今諸道文。如一卷得一善、守如得一善訣、使隨事書記之。一卷一善、十卷得十善、百卷得百善、千卷得千善、萬卷得萬善、億卷得億善、隨而書之、出衆賢共誦、去復重。因此要文、編之以究意、深知古今天地人万物之精意。」

○天者、衆道之精也。

『老子』第二十一章「吾何以知衆甫之然哉。以此。」河上公注「此、今也。以今万物皆得道之精氣而生、動作起居、非道不然。」

○賢者好道

『新書』先醒「彼世主不學道理、則嘿然愒於得失、不知治乱存亡之所由、忡忡然猶醉也。而賢主者、學問不倦、好道不厭、惠然独先迺達乎道理矣。」

『論衡』無形「称赤松・王喬好道為仙、度世不死、是又虛也。」

○聖（*原文の「賢」を「聖」に改めて読む）者入真道

楊寄林『太平經今注今訳』（520頁）「賢、据上下文義、当作“聖”字」。羅熾『太平經註釈』（上）（1996年、西南師範大学出版社、369頁）も同じ。

『太平經』卷四十二（合校九二頁）「行此之後、天下文書且悉尽正、人亦且尽正、皆入真道、無復邪偽文絶去、人人自隨。」

○知能仙者必真

『太平經』卷五十一（合校一九二頁）「願聞其校此者、皆当使誰乎。各就其人而作、事之明於本者、恃其本也。長於知能用者、共困而説之、流其語。」

○知真者必致神

『太平經鈔』乙部卷二、三葉裏（合校一四頁）「樂者、天地之善氣精為之、以致神明。故靜以生光明。光明所以候神也。能通神明、有以道為隣、且得長生久存。」

『後漢書』蔡邕列伝「天子以四立及季夏之節、迎五帝於郊、所以導致神氣、祈福豐年。」

○神者、上与天同形合理

『太平經鈔』乙部卷七、二十一葉裏（合校五六八頁）「吏無大小、民本因縁、宜明其事、勿為民所患。殊能好道德仁惠、与天合理、与地同意、与中和有意、思以善神靈相觀。」

『老子』第五十六章「是謂玄同。」河上公注「玄、天也。人能行此上事、是謂与天同道也。」

○天称神、能使神也

『太平經』卷一百一十九（合校六七七頁）「天者稱神、陽亦稱神、故今天使神治人。」
『太平經』卷三十九（合校六四頁）「吾者、我也。我者、即天所急使神人也。」

○神也者、皇天之吏也。

『太平經鈔』乙部卷二、五葉表（合校一五頁）「百神自言為天使為天使、群精為地吏為地使、百鬼為中和使。此三者、陰陽中和之使也。助天地為理、共興利帝王。」

『潛夫論』卜列「及諸神祇太歲・豐隆・鉤陳・太陰將軍之屬、此乃天吏、非細民所當事也。天之有此神也、皆所以奉成陰陽而利物也。」

○神人者、皇天第一心也。

『太平經鈔』丁部卷四、十六葉表（合校二二三頁）「此八者、皆与皇天心相得、与其同意并力、是皆天人也。」

○天地之性

『太平經鈔』辛部卷八、二葉表（合校六八五頁）「天地之性、自有格法、六甲五行四時節度、可以占覆未來之事、作救衰乱、防未然之事。」

『白虎通』五行「五行所以相害者、天地之性、衆勝寡、故水勝火也。精勝堅、故火勝金。剛勝柔、故金勝木。專勝散、故木勝土。實勝虛、故土勝水也。」

○精光為万物之心

『太平經鈔』戊部卷五、五葉裏（合校二九二頁）「天神（地？）自有神宝精光、随五行為色、随四時之氣為興衰、為天地使、以（成）人民万物也。」

『後漢書』馮衍傳下「覽天地之幽奧兮、統万物之維綱。究陰陽之變化兮、昭五德之精光。」

○明治者用心察事、当用清明

『雲笈七籤』卷六、三洞經教部「今甲乙十部、合一百七十卷、今世所行。按正一經云、有太平洞極經一百四十四卷、今此經流亡、殆將欲尽。此二經、並是盛明治道、及証果修因、禁忌衆術等也。」

『太平經』卷一百一十七（合校六五四頁）「夫道乃天也、清且明、不欲見汚辱也。」

『塩鉄論』相刺「天設三光以照記、天子立公卿以明治。故曰、公卿者、四海之表儀、神化之丹青也。」

『淮南子』傲真訓「夫聖人用心、杖性依神、相扶而得終始。是故其寐不夢、其覺不憂。」

『管子』明法解「明主之治也、審是非、察事情、以度量案之、合於法則行、不合於法則止。」

『淮南子』說山訓「螻無筋骨之強、爪牙之利、上食晞堞、下飲黃泉、用心一也。清之為明、杯水見眸子。濁之為暗、河水不見太山。」

『礼記』樂記「然後發以声音、而文以琴瑟、動以干戚、飾以羽旄、從以簫管。奮至德之光、動四氣之和、以著万物之理。是故清明象天、广大象地、終始象四時、周還象風雨。」

【原文】

今神人真人仙人道人聖人賢人民人奴婢、皆何象乎。

然、神人者象天。天者動照無不知。

真人者象地。地者直至誠不欺天、但順人所種不易也。

仙人者象四時。四時者變化凡物、無常形容、或盛或衰。

道人者象五行。五行可以卜占吉凶、長於安危。

聖人者象陰陽。陰陽者象天地以治事、合和万物。聖人亦當和合万物、成天心、順陰陽而行。

賢人象山川。山川主通氣達遠方。賢者亦當為帝王、通達六方。

凡民者象万物。万物者生処無高下、悉有民、故象万物。

奴婢者衰世所生、象草木之弱服者。常居下流、因不伸也。奴婢常居下、故不伸也。故象草木。

【訓読】

今、神人・真人・仙人・道人・聖人・賢人・民人・奴婢は、皆何にか象るや。

然り。神人は天に象る。天は動照知らざる無し。

真人は地に象る。地は直、至誠にして天を欺かず、但だ人の種うる所に順いて易えざるなり。

仙人は四時に象る。四時は凡物を変化せしめ、常なる形容無し。或いは盛んにして或いは衰う。

道人は五行に象る。五行は以て吉兆を卜占す可く、安危に長ず。

聖人は陰陽に象る。陰陽は天地に象りて以て事を治め、万物を合和す。聖人も亦た当に万物を和合し、天心を成し、陰陽に順いて行ふべし。

賢人は山川に象る。山川は氣を通じて遠方に達するを主る。賢者も亦た当に帝王の爲に六方に通達すべし。

凡民は万物に象る。万物は生じる処高下無く、悉く民有り。故に万物に象る。

奴婢は衰世の生ずる所にして、草木の弱く服する者の、常に下流に居り、因りて伸びざるに象る。奴婢は常に下に居る、故に伸びざるなり。故に草木に象る。

【訳文】

「今、神人・真人・仙人・道人・聖人・賢人・民人・奴婢は、皆 何に象っているのか。」

「そうだ、神人は天に象る。天は動いて物を照らし、あらゆることを知っている。」

真人は地に象る。地はまっすぐであり、至誠であつて天を欺くことはなく、ただ、人が植えたものにしたがつて（生育させ）、変えることはない。

仙人は四時に象る。四時は、万物を変化させ、恒常不変の姿形というものはなく、盛んになつたり衰えたりする。

道人は五行に象る。五行はそれによつて吉兆を占うことができ、将来の安危を見通すことに長じている。

聖人は陰陽に象る。陰陽は、天地に象つて物事を治め、万物を調和させる。聖人もやはり、万物を和合させ、天の心を成就し、陰陽に順つて行動しなければならぬ。

賢人は山川に象る。山川は、氣を通じて遠方にまで到達させることを主る。賢者もやはり

り、帝王のために六方に氣を通達させなければならぬ。

凡民は万物に象る。万物は、その生じる所、高低なく、ことごとく民がいる。それゆえ、(民は) 万物に象る。

奴婢は衰えた世に生まれたもので、草木が弱々しく服従し、常に下流にいるので、伸びることがないさまに象る。奴婢は常に下にいるので、身を伸ばすことはない。それゆえ、(奴婢は) 草木に象るのである。」

【注】

○動照無不知

『道德真經広聖義』卷四十九、八葉裏く九葉表「上士若能法聖人之心、去住任運、不貪物色、不著有無、能滅動心、了契於道。既契道已、復忘照心、動照俱忘、然可謂長生久視昇玄之道爾。」

○地者直至誠不欺天

『漢書』律曆志上「土、稼畜蕃息。信者誠、誠者直、故為繩也。」

『後漢書』皇后紀上「勤勤苦心、不敢以万乗為樂、上欲不欺天愧先帝、下不違人負宿心、誠在濟度百姓、以安劉氏。」

○变化凡物、無常形容

『太平經鈔』丙部卷三、一葉表(合校三〇頁)「天以凡物悉生(出)為富足。」

『史記』太史公自序「道家無為、又曰無不為、其易行、其辭難知。其術以虛無為本、以因循為用。無成執、無常形、故能究万物之情。」

○道人者象五行

『論衡』道虛「夫文摯、道人也。入水不濡、入火不焦、故在鼎三日三夜、顏色不變。」

○卜占吉凶、長於安危

『太平經鈔』辛部卷八、二葉表(合校六八五頁)「天地之間、凡事各自有精神、光明上屬天、為星、可以察安危。」

『論衡』自紀「孔子稱命、孟子言天、吉凶安危、不在於人。昔人見之、故歸之於命、委之於時、浩然恬忽、無所怨尤。」

○合和万物

『太平經』卷六十七(合校二五七頁)「右天教合和使人常吉遠凶之經。」

『呂氏春秋』有始「天地有始。天微以成、地塞以形。天地合和、生之大經也。」

○成天心、順陰陽而行

『太平經』卷一百十七、(合校六五三頁)「万物之精善者、上合為天、為三光也。其中者付於人、使其仕、順陰陽而理万物也。」

『韓詩外伝』卷七「善為政者、循情性之宜、順陰陽之序、通本末之理、合天人之際。如是、

則天地奉養而生物豐美矣。」

○山川主通氣達遠方

『易』說卦「天地定位、山沢通氣、雷風相薄、水火不相射、八卦相錯。」

『真誥』卷九、三葉表「太素丹景經曰、一面之上、常欲得兩手摩拭之使熱、……行之五年、色如少女。所謂山川通氣、常盈不沒。」

○賢者亦當為帝王、通達六方

『太平經』卷五十（合校一七五頁）「夫賢者一人之言、知適達一面、明不盡觀、不能用（周？）流六方、洽究達內外七處、未能源万物之精、故各異說。」

『漢書』律曆志上「中央者、陰陽之內、四方之中、經緯通達、乃能端直、於時為四季。」

○凡民者象万物

『太平經』卷九十三（合校三九五頁）「比若一家有父有母有子、亦天道具成一家。父象天、母象地、子象中和、其聚財物、家中所有象万物、亦成一家。父為君、母為臣、子為民、財貨以相通養共之象万物、此一家亦共一大憂。」

○生處無高下、悉有民

『太平經』卷九十三（合校三八六頁）「人所受命生處、是其本也。」

『後漢書』鄭孔荀列傳「袁本初公卿子弟、生處京師。張孟卓東平長者、坐不闢堂。孔公緒清談高論、噓枯吹生。並無軍旅之才、執銳之幹、臨鋒決敵、非公之儔。」

『太平經』卷四十（合校八二頁）「生有先後、知有多少、行有尊卑、居有高下。」

『太平經鈔』癸部卷十、五葉裏（合校七二三頁）「陳人物生受命之時、久遠以來到今、不失陰陽伝類、更相生而久長、万万余世、不可闕也。一衰一盛、高下平也。盛而為君、衰即為民、盛即得道、衰即受刑。」

『管子』地員「五粟之土、乾而不格、湛而不沢。無高下葆沢以處、是謂粟土。」

○奴婢者衰世所生

『淮南子』本經訓「古之人同氣于天地、与一世而優遊。當此之時、無慶賀之利、刑罰之威、礼義廉恥不設、毀譽仁鄙不立、而万民莫相侵欺暴虐、猶在于混冥之中。逮至衰世、人衆財寡、事力勞而養不足、於是忿争生、是以貴仁。」

○居下流

『論語』陽貨「子貢問曰、君子亦有惡乎。子曰、惡称人之惡者、惡居下流而訕上者、惡勇而無礼者、惡果敢而窒者。」